

西光さんからの伝言

若手教師パワーアップセミナー

「元気が一番」塾 主宰 仲島正教

あの「水平社宣言」の西光万吉さんには、こんなエピソードがありました。西光万吉さんは、人の名前を呼ぶ時、年上の人にはもちろんのこと、年下の人に対してもいつも「さんづけ」で呼んでいたそうです。西光さんにとっては、その人が年上や年下、いい人悪い人、強い人弱い人など関係なく、「相手を尊敬する」という考えだったのです。

私は、中学・高校・大学と10年間ずっとバスケット部に所属し、なおかつ大学は体育学科という根っからの体育会系人間です。ですから私は先輩・後輩の上下関係は気になりましたし、自分が教師になってからも、この姿勢は変わりませんでした。先輩には「さんづけ」後輩には「君づけ」あるいは「呼び捨て」というのが、私の常識でした。そんな中で、この「西光万吉さんのエピソード」に出会った私は、大きな衝撃を受けたのです。それまで子どもたちや保護者にえらそうに同和教育を説いてきた私です。その私がこんな当たり前の「相手を尊敬する」ことが出来ていなかったのです。

私の大学時代、バスケット部の先輩にHさんという方がおられました。H先輩は運動センスも抜群で関西学生選抜にも選ばれるほどの人でした。ある日の練習の朝、私たち後輩はいつものように少し早目に体育館に行きました。すると、もうそこにはH先輩が来ておられ、なんとモップを持って体育館の掃除をされているのです。「しまった！」私たち後輩は急いでそばに行き「先輩遅くなってすみません。あとはオレたちがやります」と言ってモップを受け取ろうとしました。するとH先輩は怒るのではなく、優しい声で「早く来たものが掃除をしたらいいんや、だからオレもモップをかけるよ」と続けて掃除をされたのです。そして掃除が終わるとH先輩は一人で黙々とシューティング練習を始めました。大学卒業後、くしくも私はこの「先輩の鏡」ともいえるHさんと同じ市内の学校で働くことになりました。

「西光万吉さんのエピソード」に出会った時、真っ先に浮かんだのが、実はHさんのことでした。Hさんは、就職してから私のことをずっと「仲島さん」って呼んでくださいます。「H先輩、そんな呼び方気持ち悪いですよ、仲島！って言ってください」と私は言うのですが、Hさんはいつも「仲島さん」なのです。「もう先輩後輩じゃなくて同じ社会人の仲間だよ」Hさんは年下の私を一人の人間としていつも大切にみていてくれたのです。

「アサーティブネス（非攻撃的自己主張）」という言葉があります。自分の主張を攻撃的に言うのではなく、相手の気持ちも尊重しながら一緒に考えていこうというものです。今の人権教育でとても大切にしていることですが、この「さんづけ」は相手を尊重する、尊敬することの第一歩になると思います。たかが「さんづけ」ですが、自分より下のものをつくって安定しようとする「人間の弱さ」（差別の構造）を乗り越える大きな力になるのではないのでしょうか。

私の教え子で今年24歳になる若者がいます。最近この若者が私にこんなことを言ってくれました。「先生、差別なくすには、お互いがつながって、尊敬しあうことや」って。

この若者も西光万吉さんも先輩のHさんも、みんな同じ考えです。

そう「人間は尊敬しあうもの」なのです。